

分科会 中学校

第8分科会

福岡市立高宮中学校

第9分科会

福岡市立城南中学校

第10分科会

春日市立春日南中学校

第11分科会

福岡教育大学附属福岡中学校

研究主題

体育的学力の確かな定着を目指した、「わかってできる」体育授業 －知識と技能を関連させた学習を通して－

福岡市立高宮中学校

1 研究発表の概要

発表者：福岡市立高宮中学校 教諭 阿武正俊

(1) 主題について

①主題設定の理由

大会主題は、運動の楽しさ（特性や魅力）に触れながら運動を展開する中で、「できる」「わかる」「かかわる」「活用する」喜びに浸り、活動と喜びとの往復を繰り返すことによって指導内容を確実に習得させていくことを目指したものである。

これらの4つの喜びのうち「できる」（技能）と「わかる」（知識）については、学習指導要領解説〈保健体育科編 P.19〉において、以下の内容が記述されている。

単に運動に必要な知識や技能を身につけるのではなく、運動の行い方などの科学的理解のもとに運動の技能を身につけたり、また、運動の技能を身につけることで一層その理解を深めたりするなど、知識と技能を関連させて学習することが大切である。

また、中央教育審議会初等中等教育分科会健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会においては、『わかってできる』『できてわかる』という関係において身体能力の向上は知識に支えられている。』と述べられている。

これらのことから、本校では、前に示した4つの喜びから特に「できる」喜び（技能）と「わかる」喜び（知識）に着目し、それらを関連させて学習することが、運動の技能及び知識、思考・判断、さらには態度、いわゆる「体育的学力」の確かな定着につながると考えた。

②主題の意味

ア「体育的学力の確かな定着」とは

体育的学力とは、共通主題の中でも述べられているとおり、中学校学習指導要領（保健体育編）に示された運動に関する「技能」や「態度」、「知識、思考・判断」のことである。これらの学習内容を獲得し、生涯にわたって、真に運動やスポーツに親しんでいく基盤を身につけることと考える。

イ「わかってできる」とは

各領域の各種目において用いられる技術や戦術、作戦の具体的な行い方を科学的な知識として理解し、その通りにできるということである。「わかってできる」生徒の姿とは、獲得した知識をもとに自分の動きやプレイをイメージし、そのイメージ通りに運動ができ、コツやポイントを自分の言葉で言語化できるものとする。

ウ「知識と技能を関連させた学習」とは

技能を身につけさせる上で、知識の学習は必要不可欠であり、それは、無意識のうちに行われているものである。しかし、体育的学力の確かな定着を目指す上では、この2つをより関連させた学習が必要であると考ええる。

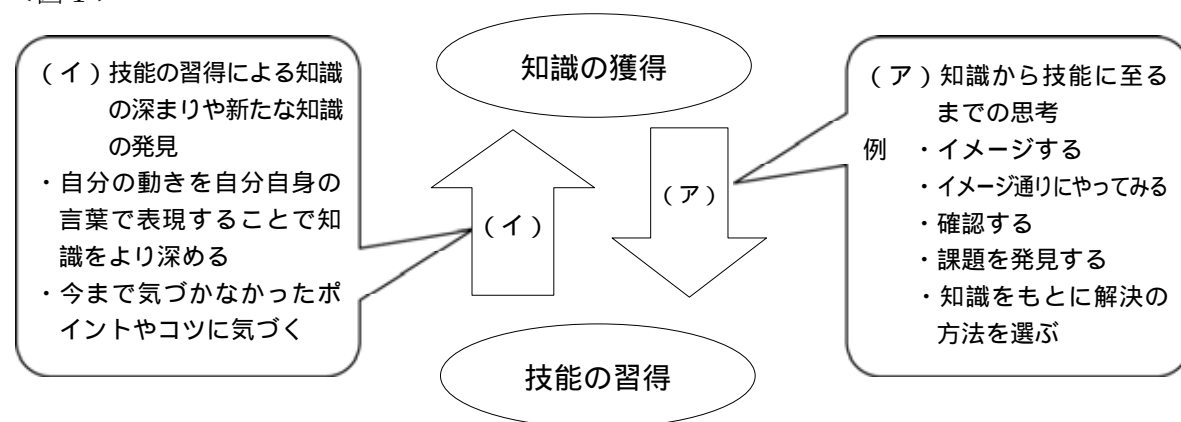
そして、この「関連」を次の2点ととらえる。

(ア) 知識から技能の習得に至るまでの思考

(イ) 技能の習得による知識の深まりや新たな知識の発見

このように「知識と技能を関連させた学習」とは「知識から技能へ」、「技能から知識へ」の過程に着目した学習ととらえる。

<図1>



(2) 仮説について

知識と技能を関連させた指導法を以下の着眼点から具現化すれば、生徒は運動の行い方などの科学的な理解をもとに思考、判断し、「わかってできる」ようになるとともに、運動のコツやポイントを自分の言葉で言語化できるなど、体育的学力の確かな定着に結びつくであろう。

① 身につけさせる「体育的学力」の関連分析と単元計画への位置づけ

- ・各単元において、身につけさせる体育的学力（主に技能と知識の関連）を学習指導要領および解説に基づいて分析、整理し、効果的に学習指導過程に位置づける。

② 「知識」と「技能」を関連させた学習指導過程の構築

- ・運動の行い方やコツなどの科学的理解に基づいた技術や戦術、作戦の指導をより効果的に進めるための学習指導過程を構築する。

③ 「知識」と「技能」を関連させた学習指導における具体的な支援の工夫

- ・『わかる』ために必要な学習資料及び、獲得した知識をもとに技能を身に付ける、『できる』ための学習資料を作成する。

2 公開授業

(1) 第1学年「バレーボール」

本単元について

○生徒・・・1年生32名（男子18名女子14名）

○主眼

攻防の中で個人やチーム技能の課題に気づき、課題解決のためのポイントやコツを言語化し、仲間に伝えることができる。

○用具

①個人ノート・筆記用具②チーム用作戦シート③キッズバレーボール

④ソフトバレー支柱・ネット2セット⑤電子タイマー⑥得点板⑦電子ホイッスル

⑧指導用ホワイトボード（大）⑨長机8台⑩チーム用かご8個⑪ラインフラッグ4本

○活動の展開

①はじめ

ア) 準備運動・・・号令走、ラジオ体操

イ) ポイントの確認・・・フラッシュカードを使用し、構え・オーバーハンドパス・アンダーハンドパスの要点を確認した。また、チームのフォーメーション確認を行った。

②なか

ア) 作戦タイム・・・作戦シートを使用し、チームごとにフォーメーションの確認を行った。

イ) チーム練習・・・4チームにつき1コートを使用し、チームで考えた練習を3分間行った。

ウ) 確認のゲーム・・・4人制ミニゲームを通して正しいパスの選択と定位置への移動等のポジショニングの学習を行った。

ゲームを行うチームはそれぞれのチームで作戦を立て、三段攻撃を目指す。審判は吹笛のタイミングやジャッジを確実にを行い、試合をコントロールする。そしてスキルチェックを行うチームはゲームをしている個人やチームのスキルチェックを行いつつ、コートの外からアドバイスを行うことを目標とした。アドバイスは身につけた技能や獲得した知識から言語化し、正確かつタイムリーに行うことを心がけ、個人やチームの技能向上を目指した。

【作戦タイムの様子】



【試合間の作戦タイム】



【スキルチェックとアドバイス】



③まとめ

ア) 個人・チームの課題と成果の確認・・・ゲームの中で見つかった課題や成果の確認を行った。チームの代表者がフラッシュカードや作戦版を使い、個人やチームの技能について発表を行った。必要に応じて補足を行い、最後に解説を行った。



○まとめ

本単元では、生徒に以下の3つの姿を求めてきた。

①笑顔で明るく、大きな②声で伝え、積極的に③活動する姿

本単元では知識と技能を関連させて学習を進めるために学習カードを活用した。さらに、学習内容や身につけた技能を生徒自身の言葉で言語化させることにより、知識をより深めさせた。知識と技能を結びつけるためにポイントやコツを言語化し、仲間に伝えることが重要であったため、笑顔や大きな声でのコミュニケーションがとても重要であると考えたからである。この2点については個人差はあったものの、スキルチェックをもとに的確なアドバイスができていた。また、チームのフォーメーションを考えさせたことにより、自主的な活動が増え、バレーボール本来のラリーを主体とした楽しみ方も学習できた。

研究主題にある「わかってできる」という知識と技能の関連について、生徒自身が意識をし、技能向上のために一生懸命活動していたことが、今回の研究の一番の成果であった。

課題としては、活動時間を長くする工夫と練習方法の改善を行い、技能の向上を目指すことである。今後は基本練習や指導法について、引き続き研究し、授業に生かしていきたい。

(2) 第2学年「ソフトボール」

本单元について

生徒・・・2年生女子40名（10名×4チーム）

用具・・・ティーボール用のボールとバット、ソフトボール用のグラブを使用

本時は、10時間目であり、ねらい2「ゲームを通して、ルールや状況に応じた走塁・守備の仕方を身につけよう」のまとめの授業を行った。

活動の展開

活動①「主運動につなげる運動」

ここでは、ねらい1で学習した基本的な個人技能（ボール操作、バット操作、走塁）を行った。

(ア) ボール操作・・・キャッチボール

(イ) バット操作・・・素振り

※新聞紙を活用した手作りバット

(ウ) 走塁・・・・・・・・ベースランニング1周

・ファーストベースを駆け抜ける

・セカンドベースで止まる

・サードベースを回ってホームを駆け抜ける

これらの内容を獲得した知識を意識しながら約7分で行った。

活動②「状況に応じた走塁とアウトの取り方の確認」

ここでは、チームごとに、教師から提示された場面の各ポジションの役割について確認を行った。

ケース1・・・ノーアウトランナーなしのショートゴロ

ケース2・・・ノーアウトランナー1塁のショートゴロ

ケース3・・・ノーアウトランナー2塁のライトへのヒット

決まり事のように覚えるのではなく、必ず根拠を説明できるようにさせ、そのための補足を必要に応じて行った。

<活動>



<活動>



活動③「ねらい2：まとめのゲーム」

前時までのケースゲーム

ゲーム①「ノーアウトランナーなし」

ねらい・・・基本的なルール（三振、ファール、守備位置、アウトなど）

ゲーム②「ノーアウト1塁」

ねらい・・・守備：フォースアウト

走塁：ゴロで走る、フライは走らない

ゲーム③「ノーアウト2塁」

ねらい・・・守備：タッチアウト

走塁：ゴロで走るか走らないか

ケースゲームを行うことにより、ソフトボールのゲームの進め方や状況判断が少しずつできるようになってきた。そこで本時では、ねらい2のまとめとして、特別な状況設定は行わず、一定の時間で攻守交代をするゲーム（時間制通常ルールゲーム）を行った。

ゲーム④「時間制の通常ルールゲーム」

<主なルール>

- ・「ランナーなし」から攻撃を続ける。
- ・8分間で攻守交代する。
- ・アウトカウントは関係なし。
- ・ホームインで1点。
- ・アウトを1つとったら1点。
- ・バント、盗塁はなし。

<活動>



活動④「反省会」

本時の学習のめあてに沿った振り返りを行った。ここでは、自分の動きやプレイをできるだけ具体的に言語化させることにより、個人の考えをチーム全体で共有させた。

まとめ

本単元では、生徒に以下の2つの姿を求めてきた。

求める姿①・・・獲得知識をもとにその通りにしようとする個人の姿

求める姿②・・・アドバイスやかけ声、声援が活発に飛び交うチームの姿

そして、各活動に入る前に①②など、常にその姿を意識させてきた結果、技術的な内容の活動時には、コツやポイントを意識しながらその通りにしようとする姿が見られた。また、ゲームにおいては、チームが一体となり、一生懸命に応援したり教え合ったりしている姿が見られた。ソフトボールが「上手にできる」ところまでは至っていないが、全くソフトボールの経験のない女子生徒が、生き生きと目を輝かせてボールを追い、バットを振る姿が見られたことは大きな成果であった。

3 研究協議

(1) 自評<ソフトボール>

○ゲームになると、今まで意識してやっていたことが頭から離れていた。

(バッティングの構えなど意識すればできること)

○守備面では、やったことのない1・2塁の場面で、3塁フォースアウトがとれていた。

○走塁では、楽しさばかりになってしまっていて、学習したことが頭から離れていた。

○今後、生徒の反省をめあてにそったものにしていく。

内野では、送球に応じてベースカバーにつく(ベースカバー)、走者がいる際のもう一人のランナーを意識した(2つ目のプレイ)。

外野では打球と送球のカバー(バックアップ)。

(2) 自評<バレーボール>

○「笑顔」「声」「活発な活動」を授業の約束事になっているが、緊張があつてか、いつもの元気がなかった。

○前時までにブロックが少しずつ出だしていたので、ブロックからの守備の動き、攻撃の動きが、各チームの作戦タイムの中で出ている。

○スキルチェックカードを活用し、正しいパスを選択できているか等のアドバイスの声が出ている。

(3) 質疑・応答

【質問】ソフトボール

1. 言語化において生徒から出てきたポイントのコツを教えてほしい。

2. 言われたことに対してすぐにできる生徒とできない生徒がいる中で、できない子に対しての指導方法を教えてほしい。

3. 子どもたちの声だしなどすばらしかった。これだけという信念を教えてほしい。

【応答】

1. 「先に足をついて腕を振ったらうまくいった」「耳の高さに腕を上げる」

「グローブをつけないで素手の方がとれる」「グローブでとるというよりも、素手でとるという感じでとればボールがとれる。」

2. 女子はルールもゲームの仕方も知らない。それが自分たちでゲームができるようになればいいと思う。それが生涯スポーツにつながると考えている。

わずかな時間の中で技能を伸ばすことは難しい。想定の中での展開。おびにとっていくことで、ねらい1でやったことが身につけばいい。指導としては毎時間、チームに張り付いて、個人指導を行っている。次回からはとる・投げるができない子をピックアップして指導ができればと考えている。

3. ソフトボールの授業に入り、厳しい指導がなくなった。全国発表を機会に準備万端で意気込みをもって取り組むようになって、生徒を迎えてやると、生徒もがんばりで返してくれた。

「教師ががんばれば、生徒ががんばる」ことを気付かされた。

【提案】

○子どもたちの言葉を大切にしたい授業。生徒の言葉を付箋等で貼り付ける。(拡大した写真など)他のグループの言葉との共有ができる。

【質 問】 バレーボール

1. 本時のめあてが守備隊形や個人の役割・・・とあるが守備隊形の知識が指導案にも載っておらず、ポイントゲットカードにも載っていない。子どもたちに知識はあるのか。目指す生徒像はアタックをできる生徒を目指していたのか、ブロックなのか、各チームに任されていたので、漠然としためあてになっていたのでは？
2. 準備運動でラジオ体操を何故取り入れたのか？
3. 4人制のゲームでコートが2面であるのは何故か？
4. 言語化において生徒から出てきたポイントのこつを教えてほしい。

【応 答】

1. ねらい1の中でスパイクが打てる生徒がでてきた。ねらい2の課程の中でバレーを理解させる。オーバーとアンダーの選択。正しいパスの選択ができれば、三段攻撃につながると指導している。

めあてについて・・・1番のポイントはスキルチェック。三段攻撃を行うためには、あくまでもスキルチェックをきちんと行い、三段攻撃、そしてフォーメーションが入ってきた状況。

2. 見せるラジオ体操を入学時から指導をしており、一年中行うため。また指先から目線まで意識してきちんと行わせると運動量としてはきつく、準備運動としては適切であると考えている。
3. スキルチェックでゲームを行わせているので、ゲームをする生徒とチェックをする生徒がおり、4人であるならば、2コートが適切コート範囲だと考えたから。
4. おでこでとらわれない→「自分の顔からいけばいい。」

アンダーで体重を前につけない。ボールを自分の体の方に向けよう→「両脚一緒に動かしたらいい。」

【意 見】

- バレーの特性を生かした準備運動があるのでは。突き指などのけががあるため。
- 練習の中でボールが交差したので、3面張れるなら、もう1面を練習コートに使用していいのではと思った。

4 指導助言

指導助言者：茨城大学 准教授 加藤敏広

○『指導助言』

天候が心配されたが、とてもよい天気になり、阿武先生、そして他の先生方も外に出られて、気持ちのよい笑顔で接していただいたので、すがすがしい気分になった。

授業を見た中で、中島先生の「ああ、なるほど。そうだね。」などの声かけと、阿武先生の「うん。今のは間違っていないよ。」「よく気がついたね。いいよ。」などの声かけがあった。やはり私たち教師は子どもたちと何かをやろうとしているときに「いいよね」「そうだね」「いいところに気がついたよね」などのちょっとした一言が自然に出なければならない。声かけについては本当によくできていた。『わかる』『できる』をどうやってすり合わせていくかは非常に大きな課題だが、授業を見て、今日に至るまでの過程が大切であると感じた。阿武先生から、「子どもたちが変わってきた」「自分自信もこの数ヶ月間で変わってきた」というメールが一週間前に届いた。それが研究の成果であると思う。

私は大学で「技能伝達」に関する授業を行っている。授業の中で学生から「わかる」ということと、「できる」ということがどういうことなのか、という質問がある。「本当にわかるということがどういうことなのか」、また「本当にできるということがどういうことなのか」について、授業で話し合いをさせ、紙に書いて、また話し合いをさせる学習をしたときに、本当に「わかる」というのはできているときの体の感じとできていないときの体の感じが自分でわかっていると学生が書いていた。私たち体育人は自分の体の感じがなんとなくわかっているが、それをちゃんと自分の言葉で紙に書けるというのはすごいことだと思う。できている時の体の感じと、できていない時の体の感じの違いを自分で「わかる」ことが「できる」ことにつながる。

○『運動指導場面で「身になる」ということ』についての講話（以下資料）

第49回全国学校体育研究大会福岡大会 第8分科会
「運動技能の確かな定着を目指した、わかってできる体育授業」
2010/11/19 福岡市立高宮中学校
＜話題提供＞
運動指導場面で「身になる」ということ
指導助言者 加藤敏弘（茨城大学）

新学習指導要領

- ・生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する基礎を培う
- ・各種の運動の楽しさや喜びを味わわせながら個に応じた体力の向上を図る
- ・「技能」、「態度」、「知識、思考・判断」などをバランスよく身につけさせる
- ・「できる（技能）」「わかる（知識）」「かかわる（態度）」喜びと、それらを「活用する（思考・判断）」喜びを味わわせる

体育教師の隠れ蓑

- ・運動学習のマネジメントしかやらない体育教師は、自らの要求した習練課題を達成するための運動感覚の図式化指導を完全に放棄していることになる。
- ・生徒ができないのは教師の指導能力がないからではなく、すべて生徒の能力不足ないし努力不足に責任を転嫁できる。一中略一生徒が動き方を工夫して、自らの運動感覚図式を構成し、やっと見つけた私のコツやカンに感動しているのに、教師はその生徒の肝心の運動感覚に共感もできないし、その工夫に耳を傾ける気もない。（金子明友『わざの伝承』pp.81-83）

技の習得が生徒に丸投げされている

- ・体育教師はかつて若いときにできたかもしれないけれど、今はもうできない運動教材を教えるのです。そこでは生徒ができるようになる学習内容や練習手順を教えるけれども、その動き方のコツやカンは生徒に丸投げすることが許されます。
- ・運動教材の学習手順を呈示するだけなら他教科の素人の先生でもマニュアルに沿って教えることができます。問題の解けない数学教師は成立しないし、英語がわからない英語教師は失格なのに、体育教師は運動教材の動感構造が何一つ理解できなくてもよいのでしょうか。（金子明友『身体知の構造』pp.257-258）

動感伝承の大地の創造

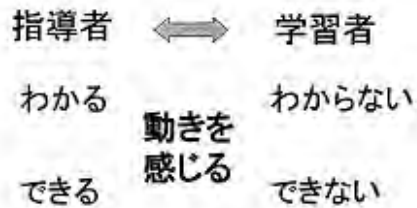
- ・生徒の主観性を直観できる動感力をもった先生が、現にいて、他人である生徒の主観的な動感作用に入り込んでコツやカンを指導できるのです。その教師の動感志向体験の中には教えている生徒の動感地平になじみが生じ、生徒と似たような動感メロディーが流れるのです。その生徒と教師は共通の間動感世界に一緒に住み込んでいることがわかります。こうして伝える指導者と承ける学習者の間に共通の動感伝承の大地が創り出されます。（金子明友『身体知の構造』p.259）

技のベクトル

- ・達成の正確さを最高にすること
- ・パフォーマンスの身体と精神のエネルギーコストを最少にすること
- ・使用時間を最少にすること

エドウィン・ガスリー(1952)

技の響き合い



「わかる」と「できる」→身になる

- 頭で技術(知識)が「わかる」
- 体で技能を発揮することが「できる」



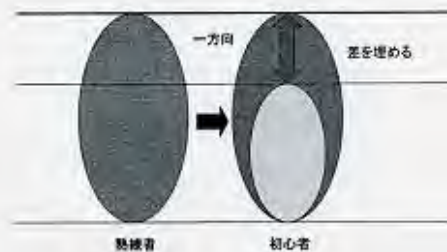
- 指導者が「私が自らの動き方を修正する」という態度に切り換えて本人の身になって工夫すれば、その態度は修正化の指導に特別な意味づけを与えることになります。(金子明友『身体知の構造』p.374)

代行能力発生分析 (身代わりの身体知)

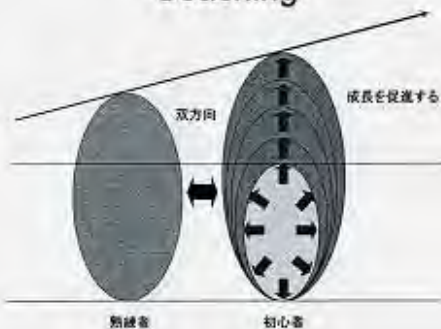
- (A) 代行世界発生分析(身代わりに住める身体知)
- ① 代行動感世界発生分析(世界に住み込む身体知)
 - ② 代行原形態化発生分析(原形態を代わりにつくる身体知)
- (B) 代行形態発生分析(身代わりに形づくる身体知)
- ① 代行統覚化発生分析(代わりに統覚化できる身体知)
 - ② 代行修正化発生分析(代わりに修正化できる身体知)
 - ③ 代行適合化発生分析(代わりに転移できる身体知)

金子明友『身体知の構造』p.53

Teaching



Coaching



「身になる」ために必要なこと

- 個々の運動材に実在するアフォーダンスを明らかにし、学習者がどのような探索過程を踏むのかを明らかにする必要がある。
- 個々の運動場面に応じた創発身体知を動感できる指導者の育成が求められている。
- 個々の学習者によって共振の周波数レベルが異なるので、指導者養成の際には、チャネル(周波数)とその変化の幅(レンジ)を広げようような幅広く深い実技経験が必要である。

問題解決のためのステップ

ステップ	Step1	Step2	Step3	Step4	Step5	Step6
	問題把握	現状分析	原因追求	方針設定	解決策立案	手順化
テーマの表現	～の問題は何か	～の現状はどうなっているのか	～はなぜか	～はどうあるべきか	～はどうすべきか	～の手順はどうすべきか
キーワード	私が思うに…	現場を見るに…	なぜこうなったのか	さーやるぞ	あの手この手	SWIHH
情報収集の仕方	インタビュー・サーベイ MD, BS 思い出し	フィールド・サーベイ 文献、資料 観察、面接	BS 仮説検証分析法 ダイヤモンド	MD, BS くもの巣発想	MD, BS くもの巣発想	MD, BS
5つのアプローチ	①困っていること	①現場で観察する	①類似ケースはなかったか考えてみる	①進行方向を決める	①BSでどんなアイディアを出す	①作業単位毎に記述する
	②嫌なこと	②過去のケースを調べる	②逆のケースを考えてみる	②原因を取り除く	②アナロジー(類推法)を使って発明的なアイディアを出す	②作業単位を時系列的手順で考える
	③納得のいかないこと	③文献、資料を調べる	③このままいけばどうなるか考えてみる	③方向に従ってゴールを決める	③最高の案を作ってみる	③必要な時間、費用、資金を見積もる
	④危険なこと	④関係ある人に聞く	④なぜそうだったか考えてみる	④ゴールに飛び込んだ姿を目に浮かべる	④人、費用、時間等の条件を付加してみる	④各人の役割分担を決める
	⑤不満なこと	⑤関係ありそうな人にも聞く	⑤仮説を立て検証してみる	⑤ゴールは一つではない	⑤最適案を決定する	⑤効率一辺倒ではなくヒューマニティを考慮する
心の姿勢	評論家、宗教家のように	科学者、記者のように	哲学者、探偵のように	運動家、政治家のように	企業家、実践家のように	技術者、実務家のように
情報の質	主観的事実	客観的事実	主観的洞察	スローガン(理念)	アイディア(具体策)	実施の細案

MD:マトローム・ダイヤモンド

BS:ブレーン・ストーミング

5 ま と め

(1) 成果

本研究では、身に付けるべき『体育的学力』のうち、主に「知識」と「技能」を関連させた学習を進めることにより、「わかってできる」生徒を育て、その過程で、「思考・判断」や「態度」を含めた『体育的学力』が定着すると考えた。

まず、教師側として、身につけさせる「体育的学力」（主に技能と知識の関連について）を分析し、単元計画へ位置づけたことにより、知識＝技能習得のポイントという関連が明らかになり、どの場面で何を教えるかが明確になった。

さらに、「知識」と「技能」をより関連させた学習指導過程として、知識の獲得→動きのイメージ化→動きの自覚→動きの修正→動きの言語化という一連の流れを生徒に示し、それぞれの活動において、獲得した知識を活用させることにより、生徒は思考を働かせて積極的に運動に取り組むようになった。生徒との対話や振り返りカードの記入内容を見てみると、今まで学習の結果や過程について、抽象的な表現しかできていなかった生徒が多かったが、今回の取り組みを続けることにより、技能の習得に必要なポイントやコツなどをより具体的に自分の言葉で表現できるようになった。これは、生徒がただ漠然と運動に取り組んだのではなく、知識をもとに思考を働かせて運動に取り組んだ結果ではないと考える。

また、それぞれの学習を効果的に進めるための学習資料は、ねらい達成のための手だてと同時に、協力や愛好的な態度などの「態度」面の向上に対しても有効であった。カードを中心に顔を寄せ合い、意見交換やアドバイスをする場面からその効果は十分に感じられた。このように、獲得した知識をもとに、運動を行い、その過程において、協力などの態度や課題に対する思考・判断する場面が見られたことは、大きな成果であった。

(2) 課題

一方で、主題設定の理由にも挙げていた、「運動技能の伸びを実感」という点においては、十分とは言えなかった。運動経験の乏しい生徒は、知識として頭ではわかっているが、その通りにできないことが多く、単元を終了したときに技能の高まりを実感することができない生徒もいた。特に球技においては、タイムなどの記録や技の完成などとして実感することが難しい。しかし、ねらいにそって、意欲的に取り組んだ生徒は、少なからず、何らかの成果はあるはずである。

そこで、今回は、主に1・2学年において、基礎・基本の定着に目を向けてきたが、今後は、身につけた体育的学力を生かし、一人ひとりが、単元終了時に技能の高まりや所属感などを味わうことができる体育学習にも取り組んでいきたい。この「有能感」が次のステップへ向かう大きな力になるのではないかと考える。

研究主題

運動の楽しさを味わいながら、知識や身体能力を高め合う体育学習
 - コミュニケーション活動を生かした学習指導過程の工夫を通して -

福岡市立城南中学校

1 研究発表の概要

発表者：福岡市立城南中学校 教諭 吉村由美子

(1) 主題について

本校では、平成19年度より、学校の教育目標として「自己表現力」「学習規律」「学習意欲」の育成という三本柱で取り組んでおり、保健体育科においては、コミュニケーション活動を中心として生徒一人ひとりに体育的学力を確実に身につけさせることができるための研究を進めてきた。

研究の進行とともに、教師間で課題を共有するなどの連携が深まる中で、教科やクラスの区別なく学習規律の確立が図られており、それに合わせて生徒達も授業に対して意欲的に取り組む姿勢が見られるようになった。体育学習においても、生徒は何事にも意欲的に取り組む生徒が多く、毎時間の学習の自己やチームの課題に対し、熱心に取り組む姿勢が見られ、自分の能力を高めるために努力をしている。しかし、学習活動においては、友達同士でアドバイスをしながらお互いを高め合うというコミュニケーション活動が少ない状況が課題となった。このような課題を踏まえ、学習導入において生徒に体力に応じたストレッチや補強運動を専門のスポーツトレーナーに支援をもらい作成することで体力の向上を目指すとともに、仲間同士のコミュニケーションの場を学習指導過程に位置づけながら、各運動の特性に触れ、楽しさを味わいながら互いに知識や身体能力を高め合うことで、福岡大会の研究主題である「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造～幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて～」の体育的学力が定着すると考え研究主題を設定し、授業実践による検証を行った。

(2) 仮説について

体育学習の学習指導過程において、以下の着眼点を踏まえ、仲間とのかかわりを深めながら自主的に学習することで、「できる」「わかる」「かかわる」喜びを味わい、さらに身につけた知識や身体能力を「活用する」喜びを味わうことができれば、生徒達は体育的学力を確実に身につけていくであろう。

着眼点 生徒の発達段階を考慮し、年間学習指導計画を作成する。

着眼点 ・生徒の体力実態をもとに、仲間とのかかわり合いながら体力の向上を目指す。
 ・学習指導過程で基礎、基本的学習内容を確実に習得させ、さらに発展学習に進める教材を工夫する。

着眼点 運動する喜びが確実に体育的学力の定着に向かうように評価の支援を工夫する。

2 公開授業

(1) 第3学年 単元名「ダンス」(現代的なリズムのダンス・**創作ダンス**)

授業者：副島 裕妃子

はじめに、まず生徒に、創作ダンスの特性や学習の進め方についての説明をおこなった。優れた作品の中でも、生徒にとって、特に創作のヒントになるもの、これならできると思わせるようなものを厳選して生徒に視聴させた。

創作活動を行う中で、動きが模倣的になってきたので、動きのヒントになる「4つのくずし」を細分化させて、それを組み合わせて即興で創作する学習を入れてみた。論理的思考のできる3年生の生徒達には効果があった。

創作テーマを「ふくおか」とし、「はじめ」-「なか」-「おわり」の構成にした。事前に「はじめ」の部分を即興で創り、その後「おわり」の部分の創作をみんなでおこない、そこで手順をみんなを確認しながら、創作をしていった。発表は「なか」の部分のグループ創作にした。そして見せ合いを「はじめ」-「なか」-「おわり」を通して行うことにした。生徒たちは、自分たちが表現したいことを体全体で表現できた。終わった後の表情は、とても素晴らしかった。

課題は、創作への手がかりと雰囲気づくりにつながっていく導入時の「体ほぐしの運動」のバリエーションを増やすことである。



(2) 第1学年 単元名「柔道」

授業者：田上 健二

「相手を投げてみたい」「戦ってみたい」「勝ちたい」という生徒が多かったが、柔道が未経験者であったため、投げ技からではなく、固め技(抑え技)の練習から取り組んだ。抑え技の自由練習を段階的に行い、早い段階で抑え技の試合練習と審判法を取り入れたことにより、柔道のことをほとんど理解していなかった生徒や、「柔道は痛い・怖い」と言っていた生徒も、怖がらず意欲的に取り組み柔道を楽しむことができていた。

また、受け身の練習においては、投げ技と関連付けて練習することにより、投げられる技(投げられる方向)によって受け身の仕方が異なることもしっかり理解させることができた。中でも、後方に投げられる技の場合の受け身においては、今回、従来のは後ろ受け身ではなく、後方に投げられながら横受け身を取る方法を今回取り入れた。その結果、投げられてもほとんど後頭部を打つことなく、大変効果的な練習方法であった。



半数の生徒が柔道に対してマイナスイメージを持っていたが、怖がらず・いやがらずに積極的に柔道の授業に取り組めたことが、今回の大きな成果であった。

3 研究協議

(1) 分科会研究構想について

「本大会の研究主題と本校の研究主題との関連について」

- 体育的学力の定着を図るとあるが、城南中の保健体育科の「体育的学力」のとらえ方はどのようなものか。
- 定着させるための指導はどのように考えているのか。

本大会の体育的学力である「技能」や「態度」、「知識、思考・判断」を身につけさせるために4つの喜び(できる喜び・わかる喜び・かかわる喜び・活用する喜び)を味わわせることを重点に置き授業を進めていった。本校では、体育的学力を確実に身につけさせるために、生徒の発達段階に応じた年間学習指導計画を作成した。次に体力の向上を図るために新体力テストの結果で強化しなくてはならない体力を中心にストレッチ・トレーニングを毎時間取り入れた。学習内容では基礎・基本的学習内容を全員に習得させ、さらに発展学習に進める教材工夫を行った。評価に関しては、努力を要する状況(C)の生徒に対し具体的な支援を予測し、一人ひとり個に応じた指導や支援を行った。以上のことを行い「体育的学力」の定着に向けて取り組んできた。

「本校副主題のコミュニケーション活動を生かした学習指導過程の工夫について」

- 学習前の挨拶が印象的であったが、挨拶についての指導は他の場面でも行っているのか。
- 「コミュニケーション」と「授業規律」の兼ね合いをどのように考えているのか。

挨拶については、授業に限らず全校で日頃から取り組んでおり、挨拶や返事をするのがコミュニケーションの一つである。教師側も分掌ごとに取り組み、生徒の自己表現力やコミュニケーション能力の育成に重点を置いている。特に柔道では、場に対する挨拶、相手に対する挨拶を日頃からきちんと行うよう指導している。生徒には「めりはり」をつけることが大切であるという話をしており、楽しくやるのは良いが人の話を聞くとときは集中して聞くという姿勢が生徒全体に浸透しているのだと思う。本日は生徒たちが非常に張り切っていたせいもあり、なかには自己評価で理解できないけれど返事をしている生徒もいた。返事さえ元々良くすればいいという雰囲気になっている点では、これからの課題である。ダンスでは「けじめのある」授業を意識しながら、「規律」を大切にした授業から「コミュニケーション」を促すという授業を行っている。

- S S Tのスポーツトレーナーへの依頼方法について。それぞれの種目の特性をどのようにS S Tに入れているのか。

スポーツトレーナーについては、部活動で依頼している方に新体力テストの結果で強化したいトレーニングのアドバイスをもらい、全学年で取り組むようにした。どの種目にも強化しなくてはならない柔軟性や瞬発力をベースに置きながら、その種目に必要なトレーニングを随時取り入れている。新体力テストの結果により、毎年検討してトレーニングを変更していきたい。



(2) 公開授業について

第3学年 単元名「ダンス」(現代的なリズムのダンス・創作ダンス)

・授業では、ダンスを選択した生徒だったのでとても表現が上手で素晴らしい動きだったと思う。特に、男子があれほど動いて楽しんで踊っている姿を見て驚いた。

○選択学習をした場合、希望の偏りやとりたい種目が取れない生徒など、選択制の希望調査で苦労することがなかったか。

ほとんどの生徒を第一希望にすると偏りがでるので、前期で第一希望は後期では第3希望にするなど、なるべく希望通りになるように人数調整を行った。また、アンケートに希望理由を記入させ、その思いや意志の強さを見て決定を行った。

○ダンスのグループ分けはどのように行ったのか。

ペアについては、「運命のペア」ということで、毎回早く来たものから自由にペアを組んでいる。グループについては、曲を聴かせ、その曲に合う表現やイメージに近いもので集まり4つのグループに分けた。

○ダンスの評価ではどこまでできればひとまとまりなのか、どれくらい変化をつければ評価できるのか、また、ほとんどの生徒がおおむね満足できる内容だったが、どこからがAでどこからがBなのか。自分自身、苦労している点なのでアドバイスを頂きたい。

ひとながれやひとまとまりは、今回の授業で苦労している所で村田先生からアドバイスももらいながら行ったが、まだ理解できていない点もある。自分の中ではひとながれとは、即興表現のことで授業のはじめの部分で一度踊り出したら止まらずに最後まで踊ることがひとながれの表現だと思っている。ひとまとまりとは、グループの中で、はじめ・なか・おわりがある表現で作品をひとまとまりと考えている。



評価では、4つのくずしを学習させ、作品の中に4つのくずしが入っていればAをつけている。今日の授業では2班の女子グループで変化が乏しいところがあり、Bの評価をしている。

○ダンスの授業でヒントカードとムーブカードがあるがそれはどんなものなのか。

どうしても踊りが模倣になってしまうので、生徒がイメージしたものをカードで作り掲示している。また、そのカードを3つずつ組み合わせながら動くようにし、それをお互いに見せ合うことにより、さらにいい動きを作っていくことができるという作業を繰り返し行った。

[村田先生より評価について補足]

先生が何を目標にするのかで評価は決まってくるものである。ダンスでは、技能は目標ではなく、何を表したいかのヒントが聞かされていることが多い。今回の授業では、変化(はじめ・なか・おわり)がどの程度できているかが観点になり評価になると考える。評価という前に指導で何をしているか、そしてダンスでは動き方が制限されるので、本当にいいかどうかは何をやりたいかで変わる。そのあたりは、評価はできたけれど、特性から離れるということがないように、わかりやすいものがすぐに目標化されないように評価しなくてはならない。また、ダンスと柔道の評価はその細部で異なる点もあるが、共に特性と教える内容に矛盾がないことが大事である。

第1学年 単元名「柔道」

- ・先生が生徒を大切にしていることが体からにじみ出ていた。武道を教えることの原点に振り返ることができた。今後は自分も「礼」を中心に教えていきたい。
- ・女子だけの授業で、汗をかくほど運動量を確保するのが難しいが、生徒達がとても生き生きとしていて、学習前の挨拶や返事などとても印象的だった。
- ・技術的なアドバイス等は初心者の生徒には難しいところがあるが、今日のめあての「試合運びを覚える」であれば、生徒にわかりやすく書き出して掲示したりアドバイスの声かけをすると、さらにめあてに合ったアドバイスができると思う。
- コミュニケーション活動の中で、生徒同士でアドバイスをする場面があったが、どのようにアドバイスを要求していたのか。仲間との関わりの中で、運動について理解していないとアドバイスは難しいが、そのための手だてはどのようにしていたのか。

1年生の女子全員が柔道初心者で、技術的なアドバイスはできていないが、生徒には、頭部を守るための3点、礼法に関するもの、服装に関するもの等アドバイスをする関わり方を学習させるようにした。これから技術的な面を指導していく上で、技術的なアドバイスができればと考える。また、子ども達にアドバイスができる場や、声をかける雰囲気を作っている。



- 女子生徒の中には事前にビデオ学習をしても恐怖心や抵抗力をぬぐえない生徒もいると思うが、どのように動機付けをしたのか。また、そのための工夫があれば教えてほしい。
- 相手がいてこそ柔道ができることや、何が大切であるかを教える。強くなることよりも、柔道の楽しさを教えられるように工夫をしている。また、受け身が上手な生徒もほめるようにしており、投げられ上手になるように指導をしている。12単元の中で、無理に危険性を伴う投げ技を用いた試合をする必要はなく、自由練習で十分と考える。自由練習の時も自分が10回投げられても2・3回は投げられ、相手の技を認めることを指導しているので、苦手な生徒も喜んで行っている。

4 指導助言

助言者：筑波大学 教授 村田芳子先生

今回の授業は、見ていて気持ちのいい授業、発表にいたるまでの過程が知りたくなる授業であった。協議会でもたくさんの意見が出て、色々な材料を提供してくれた発表であった。授業をやる者にとって、本当にやったと思える授業はたまにしかなく、多くはもっと工夫をしなくてはいけない内容だったりする。そのダメな授業でも一つひとつに大きな意味があり、公開授業で何をやりたいのか明確であれば良い授業だと思っている。また、公開授業を見た人が問題を共有できることもポイントになる。

今回この2つの授業で投げかけたものは、中学校学習指導要領の24年度の完全実施に向けて必修化される種目で、一番注目されている武道とダンスであり、どう授業に取り組んでいけないといけないのかとても切実な問題としてある中でタイミングの良い発表で勉強になった内容だったと思う。

協議会では質問はなかったが、コミュニケーション活動はただ返事や教え合いや仲良くするといったことではなく、それを学習過程の中にどう位置づけるか、その特性に合った関わり合い、態度だけの問題ではなく内容として見ていくという意味のコミュニケーションだと理解している。球技では、ボール運動が〇〇型で分けられたのは、ゲームが、他者との関わりとどう違うのかをパターンで分けたもので、この内容から見たコミュニケーションへとつながっていく。

ダンスの授業は、色々な意味で生徒の個人差が出てきたり、恥ずかしがったり、時には、体育の授業をやっているのに体が眠っている状態になっているので、起こしてスイッチ入れることが必要となってくる。また、不安定な中学生をどうするのが重要視されている。その中で自分なりのテーマは、なんでもその気にさせること、まずは、ぐっと引き込んで本気になることが大切だと思う。9月の授業では、副島先生はその気にさせてのせていくのが上手であったが、本気にさせるためには動きのおもしろさを教えないといけないというところが課題であった。今回の授業では、生徒達が本気になっており、確実にめりはり等、技術的な話をしても吸収して授業を行うことができていたところが良かった。

柔道の授業では、田上先生は本気にさせていくコツを十分知っているのも、逆に、それが今回の授業では、審判の仕方などの内容で技をかける練習に比べて運動量が少なく、後半は、エネルギーが落ちてしまった面もあった。単に形だけではなく、特性にどんどん触れることが楽しさにつながるが、今の段階では、「おもしろさ」が重要になる。今回、どちらの授業にも、その気にさせる、本気にさせるヒントがあった授業だった。

ダンスの授業では、今回は現代的なリズムのダンス・創作ダンスの組み合わせ单元であったが、この場合、組み立てを男女共習や生徒の様子を見ながら行うことが重要である。

今回のダンスでは、「やってみよう・広げよう・深めよう」という言葉を使っているが、「やってみる」とは、習得のことで柔道では基本のところにあたる。柔道は基本を何時間かかけて行う必要があるが、ダンスでは、1時間の中で



「やってみよう」があり、「広げよう」につながる。さらに「やってみよう」と「広げよう」を繰り返しながら、最後の3・4時間をかけて作品作りの「深めよう」になる。柔道は、基礎・基本・発展学習を組み合わせで行うことが、学習過程の流れである。今回良かったことは、この学習過程の中で、2人組や少人数でいつもコミュニケーション活動を組み合わせて行ったことで、そこに組み込まれたコミュニケーションの活動が機能したからだと思う。表現・ダンスの授業は、柔道の授業で規律が大切なように、日常の規律を解放させてあげる体ほぐしとダンスが重要である。今回行った授業のダンスと柔道では、対照的な要素があり、とても重要な種目であるといえる。

5 ま と め

協議会では、100名以上の先生方が集まり、本校の体育的学力のとらえ方から始まり、コミュニケーション能力の育成、規律面の指導の工夫点、評価までたくさんの意見や質問が出され充実した協議会になった。授業の感想の中では、「授業規律もきちんとしており、手だての工夫、子どもの安全面とやる気を引き出す具体的な言葉かけなどすべてのアイデアをもらった授業だった。」「子どもが生き生きしており、授業を楽しんで活動している姿が印象的であった。」「ダンスでは、生徒一人ひとりがそれぞれ表現することに前向きで、自分の心を解放していたように感じた。ダンスの本質は内側から沸き立つ心をつくることと学んだが、今回の授業はその通りだった。」「どうやってここまでの子どもの姿を表すことができるのか」「教師に求められているダンス授業での資質は何か」「今回の研究を多くの先生達に広めてほしい」といった声があった。この全国大会をきっかけとして、全国の先生方に本校の授業研究の一端を発信でき、たくさんの感想を頂いたことに感謝したい。

(1) 成果

- コミュニケーション活動を生かした学習指導に取り組むことで、生徒達同士でお互いの能力を高め合うとともに、意欲的に体力の向上を目指した。
- 習得させたい基礎・基本的な学習内容を明確にし、教師側の肯定的な言葉かけを工夫することにより、生徒達は自分の伸びを実感でき、「できる」「わかる」「かかわる」喜びを意識して追求することができた。
- 「努力を要する生徒(C)」に対して具体的な支援を予測することで、一人ひとり個に応じた丁寧な指導ができ、達成感を味わわせることができた。

ダンスや柔道の授業終了後のアンケートでは、はじめは意欲もなく一生懸命取り組めなかった生徒が、「楽しく取り組めた。またやりたい。」という感想を書いていた。自己評価では、明らかに授業前と後の意欲・技能評価が高まったことがわかった。

(2) 課題

- 生徒一人ひとりが、自己評価等を活用して課題を設定させるためには、課題解決のための教師側の提供だけではなく、生徒達が発見して工夫する「場と間」を作る必要がある。
- 指導と評価の一体化のさらなる充実を目指して、評価の工夫を一層図っていく。
- 体育理論や保健分野の知識領域においても、学習指導過程の中でコミュニケーション活動を生かした学習内容の教材工夫が必要である。

今回の研究で、「楽しさ」をどう生徒達に味わわせながら、身体能力や知識を高めることができるかという目標をおいて行ってきたが、「楽しさ」をはじめに教師側から教えることで、生徒を本気にさせる授業ができることがわかった。平成24年度に完全実施となる新学習指導要領で、さらに今回の授業のように、子ども達にとって良い授業ができるように研究を進めていきたい。

研究主題

仲間とともに課題を発見し解決を図る活動を通して、
確かな運動技能の定着をめざす体育の学習指導の在り方

- 視聴覚機器の活用を通して -

春日市立春日南中学校

1 研究発表の概要

発表者：春日市立春日南中学校 教諭 八尋 健次

教諭 山口 憲昭

(1) 主題について

大会主題とのかかわりから

全体研究では、「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造をする」ことを目指している。本校保健体育科では、全体研究の中心は「体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」であるにとらえて、生徒一人ひとりに体育的学力の確かな定着を図ることができるよう研究を進めている。

全体研究の柱を本校保健体育科では、「できる」「わかる」「かかわる」「活用する」喜びを実感する中で、活動と喜びを繰り返し、指導内容を確実に身につけさせていくことであるにとらえている。

全体研究では、研究主題の構成要素を「わかる」「できる」「かかわる」「活用する」ととらえているが、本校保健体育科でも学習指導過程において、運動の仕組みや課題の解決の仕方がわかるようになり（「わかる」）実際に運動を行ってみて、試行錯誤を繰り返しながらできるようになり（「できる」）その過程において仲間とともに競い合ったり、励まし合ったり、認め合ったりしながら仲間との関わりを深め（「かかわる」）伸びていくと考えている。そして、その伸びが生徒自身に実感できたとき、自ら、新しい目標を設定し、身につけた運動の技能を自ら活用するようになる（「活用する」）であろう。

全体研究から上記のような点をふまえて、「仲間とともに課題を発見し解決を図る活動を通して、確かな運動技能の定着をめざす体育の学習指導の在り方」という本校保健体育科の研究テーマを設定し研究を積み重ねてきた。

研究の過程から

本校保健体育科では、これまでに「仲間とともに課題を発見し解決を図る活動を通して、確かな運動技能の定着をめざす体育の学習指導の在り方」を研究し、実践をつみ重ねてきた。

その道は決して平坦なものではなく、試行錯誤の繰り返しだった。どのような学習指導を仕組みれば、生徒は仲間とともに課題を発見することができるか。そして見つけた課題を仲間とともにどのように解決していくか。それに教師がどのような形でかかわればよいのか。運動が苦手な生徒や、運動が嫌いな生徒にどのように関われば、その生徒達に確かな運動技能を定着させることができるか、常に話し合いを繰り返し実践し、検証を重ねてきた。

そこで、本校保健体育科では、研究主題を達成させるための手だてとして、視聴覚機器を活用した学習活動を工夫することにした。

本校では、運動単元を「一次」「二次」「三次」と三段階に分け、「一次」では、「オリエンテーションビデオ」として、生徒たちが単元の目標を設定することが容易にできるようなビデオを用意した。「二次」では、示範となるビデオを準備し、自分の技能と照らし合わせながら、自分の運動技能の課題の把握が容易にできるように工夫した。ビデオはHDビデオと映像遅延装置の2種類を用意し、スロー再生で自分の運動技能の課題をわかりやすく把握できるようにした。「二次」では、自分と仲間の運動技能をビデオでチェックし、お互いにアドバイスし合い、お互いに伸びることをねらった。そして、「三次」では運動単元の開始時（レディネス時）に、ビデオ撮影をしたものを、「ビフォービデオ」とし、運動単元の最後に技能が高まった状態でビデオ撮影したものを、「アフタービデオ」とし、この二つのビデオをつなげるように編集したものを「ビフォーアフタービデオ」と名づけて、運動単元の最後である「三次」に生徒たちに視聴する場を設定し、自分自身と仲間の運動技能の伸びを実感させるようにしている。このビデオを視聴することによって、自分もやればできるのだということに気づかせ、達成感を味わわせることをねらった。

「ビフォーアフタービデオ」の視聴で達成感を味わった生徒達に単元の感想を記入する時間を設け、それら生徒の感想を教師のコメントとともに保健体育科通信で発表してきた。これにより全体研究の「わかる」「活用する」喜びをねらってきた。

（２）仮説について

保健体育科の学習指導過程において、視聴覚機器を活用し、仲間とともに課題を発見し、解決を図る活動を仕組むことができれば、子ども達に、確かな運動技能の定着を図ることができ、達成感を味わわせることができるであろう。

２ 公開授業

（１）第３学年男子 単元名 「器械運動」第６時（単元15時間）

授業者：下野 六太

マット運動において集団演技の練習を行った。各グループ６～７名で構成し、マット６枚を四角形に並べ音楽に合わせた集団演技の練習に取り組んだ。前時までに集団演技の「示範ビデオ」の視聴をしており、演技を構成する上で横の動きや縦の動きに対する様々な技の効果的な見せ方や音楽への合わせ方などを学んできた。

本時は、最初に各グループの「技能チェックビデオ」を視聴し、全員が個人とチームの課題を見つけ、課題をフラッシュカードに記入した。その課題を解決するために、６チームのグループが３台の視聴覚機器を交代で活用し、練習をビデオに撮るグループとビデオを見ながら課題解決や演技構成を話し合うグループに分けた。前時までに全員が演技構成に対する学習を済ませているため、ビデオを見ながらスムーズな話し合いが行われ、演技が改善され課題が解決されていったことは、大きな成果といえる。



(2) 第3学年女子 単元名 「バスケットボール」第4時(単元13時間)

授業者：八尋 健次

バスケットボールで数的有利な少人数での攻防におけるオフェンスの練習を行った。生徒は前時に2対1の「つまずきビデオ」と「示範ビデオ」を視聴しており、一般的な課題と模範的な技能のポイントを把握できている。チームは、4～5人で構成し、常にお互いを観察することができるようにし、練習の中でボールに触れる回数も多くするようにした。



本時は、最初に撮影した「技能チェックビデオ」を視聴し、個人のオンザボール(ボールを持っている時)とオフザボール(ボールを持っていない時)の課題を、自分やチームで話し合いながら見つけた。その課題をフラッシュカードに記入し、練習場所のホワイトボードに貼ることで、ゴール付近で行う練習中に意識させるようにした。その後、オールコートでのよりゲームに近い形での2対1を行った。一般的な課題と模範的な技能のポイントを理解し、課題を意識しているため、コート内外から活発な声が聞こえる授業となった。また、オフザボールの動きを意識した「スペース」という言葉が出てきたことも成果といえる。

3 研究発表・協議

(1) 研究発表の詳細について

【全体研究とのかかわりについて】

- 「体育的学力の確かな定着」を本校保健体育科では「確かな運動技能の定着をめざす体育の学習指導」と同義であるとしてらえている。
- 「運動技能の定着」を目指していく課程においては「仲間とともに課題を発見し解決を図る活動」が大切である。
- ただ単に「運動技能の定着」を目指すのではなくその過程が大切である。

【視聴覚機器の活用について】

- 運動が嫌いな子ども、苦手な子どもにも一人ひとりに「確かな運動技能の定着」を目指すために視聴覚機器を活用した。

【構想図について】

- 第一次
 - ・「ビフォービデオ」を撮影する。
 - ・子どもが単元の目標設定をする。
 - ・子どもの育つ力は、主に思考力である。
- 第二次
 - ・「つまずきビデオ」、「示範ビデオ」を視聴し、一般的な課題と模範的な技能を子どもに理解させる。
 - ・「技能チェックビデオ」から自分やチームの課題を発見する。



- ・仲間とともに課題を解決するために教え合い学習（ＳＴ学習）を行う。
- ・第二次では、主に子どもの技能を伸ばす
- 第三次
 - ・「アフタービデオ」を撮影し、「ビフォーアフタービデオ」として編集し視聴することで、子どもが達成感を味わう。
 - ・最後にアンケートを実施し、感想を体育科通信としてまとめる。また、通信を読んだ保護者の感想も通信に載せて出している。
 - ・第三次では、主に達成感を味わわせることと、言語活動の充実をねらっている。

【ビフォーアフタービデオについて】

- 今回は、ハードル、水泳（クロール・平泳ぎ・バタフライ・個人メドレー）、マット運動、レイアップシュートについてのビフォーアフタービデオを研究発表で視聴していただいた。

（２）研究協議について

質 問 内 容	回 答
○他の班との交流はどのようになっているのか。 ○終末段階で発表会をどのように行うのか。 ○指導者の出番（指導）が少ないように感じたが	●いつもは武道場で授業をしていて、マットも限られているので、気になる他の班の演技は自主的に見ている。 ●子ども達の激励と評価の場を与えたい。（学年の教師と相談） ●１年次にマット運動の技能をしっかりと教え込んだ。２年次から子ども達が意欲的に主体的に学ぶようになり、ポイント的に質問をしてくるようになった。体育会を期に「自分達で創る」という意識が芽生え、少しずつ教師の出番が減ってきた。
○集団演技の設計図（どんな課題を与えたのか）について。 ○バスケのスロー映像作成にあたっての時間はどのくらいか。	●時間は１' 30" から２' 00"（見る側が飽きない）曲は歌詞がないもの。無理をしない。個人の良さを生かす。 ●映像の勉強をして半年ほど。１枚を作るのに３０分くらいかかり、あとは１０分くらい。
○ビフォーのレベルが低い。小学校との連携はとれているのか。 ○ＳＴ学習は体育以外の他教科との連携はあるのか。	●いろんな学校を見てきたが、最初はだいたいどこも同じくらいのレベルである。小中の連携は今のところできていない。自校の研究ができてきているのでさらに深めていきたい。 ●ＳＴは学校力や学級力がベースにあると思う。学級力が根底にあると思う。
○つまづきの（バスケ）を見ていて課題を把握していた。練習の場面で見ている生徒が指摘できる場面（話し合い）や先生がストップさせて指摘をしていいのではないか。 ○ボールを持った瞬間にシュートを考えるべき。（パス・ドリブルにこだわりすぎ）	●教師は課題を意識させることに徹していた。今度は必要になってくると思う。 ●２年生の時にシュートにこだわってきたので、３年生では高校につなげるためにスペース作り等に力を入れた。
○グルーピングの仕方人間関係など考慮したのか。 ○単元のどの段階でグルーピングをしているのか。	●基本的には人間関係を考慮しない。 ●最初に行う場合もあるし、途中段階で行う場合もある。変化させるときもある。

4 指導助言

指導助言者：東京学芸大学 准教授 水島 宏一 先生

まず始めに、6月の終わりに研究授業を見ていた3年生の子ども達がどのように成長しているかを楽しみにしてきた。先ほどの質疑の中にビフォーのレベルが低いのではないかという質問があったが、今は体育科の大学生でもマット運動が苦手だったり、鉄棒の逆上がりができなかったりする学生がいる。また、その学生達は、どこか分からなくても聞きに来ない。できないのが当たり前、自分にはできないとあきら



められている者がほとんどである。しかし、春日南中学校の子ども達は誰もが聞きに来て自分から成長しようとする目つきや意欲がこれまで見てきたどの中学校でも感じなかったことである。これが、現在の学校体育の授業には必要不可欠な生徒の実態ではなからうかと感じた。現在の大学生を見ても小学校・中学校・高校で技能が伸びてきている生徒が少ないように感じる。春日南中学校の生徒は、マット運動でもバスケットボールでも運動のポイントを理解し、上手くなろうと練習したり、教え合ったりすることができていた。それは、全員が技能のポイントと課題を共有できていることが大変大きい。できないのが当たり前ではなく、やればできるのが当たり前の春日南中学校の特徴としては、視聴覚機器の使用・ST（スモールティーチャー）を中心とした授業サイクルによりできない生徒がポイントを理解できるようになっていた。その逆にどのようにしたら、このような学ぶ意欲を持った生徒を育てることができるか聞きたいくらいである。このような授業の在り方は、これからの学校体育の模範となるような授業であると感じた。

5 ま と め

時間いっぱいまで質問や意見が多く出された。しかしながら、十分な時間がとれていなかったり、質問を後日メールでもいただくことにしたことから、限られた数の質問であった。後日、届いたメールを見ると、各単元の授業サイクルに関するものがほとんどであった。特に、視聴覚機器の使い方や授業の中での教え合い活動など具体的な内容に対しての質問や授業の詳しい資料（ビフォーアフタービデオなど）を貸して欲しいといったものがあった。

（１）成果

- 技能を伸ばすという観点から、大きな成果が上がり、それをビデオなど見える形で残すことができた。また、新聞などでも紹介されるなど、さらに子どもの意欲を高めることができた。
- 子どもの伸びた様子が一目瞭然で分かり、それを見た子どもが大きな達成感を味わうことができた。また、保護者からも多くの賛同が得られた。

（２）課題

- 単元計画の決められた時間内でもっと効率よく子ども達の技能を伸ばしていくにはどのように指導していけばいいのか考える必要がある。
- 集団スポーツの「つまずきビデオ」と「示範ビデオ」は、さらに研究する必要がある。

研究主題

基礎・基本の定着を図る体育学習指導のあり方

ー獲得した知識・技能を生かす活用型の学習を通してー

福岡教育大学附属福岡中学校

1 研究発表の概要

発表者：福岡教育大学附属福岡中学校 教諭 深川成浩

(1) 主題・副主題について

本校では、平成17～19年度の研究において、「豊かに生きるためのリテラシー獲得をめざしてー基礎・基本の転移を促す学びの文脈づくりー」を主題とし、各教科における生徒の学びを総体的にとらえ、そのプロセスを評価し、それらを指導に生かす実践を推進してきた。その経過で浮かび上がってきたのが、リテラシー獲得をめざす視点である。リテラシーの概念は、時代とともに変容してきており、現在も種々の議論がなされているが、概ね「社会人として活躍するために必要とされる共通教養」という学力に関わる幅広い概念であるにとらえられる。この視点から、よりよい社会及び人生の実現につながる学びのあり方について追究していくことは、「生きる力」を育む授業のあり方を明らかにすることにつながるものとしてきた。

このことを踏まえ、本校では、PISAをはじめとする様々なリテラシーの議論を参考にして、各教科で「豊かに生きるためのリテラシー」を獲得した姿を想定し、実践的研究を進めてきた。その際、学習指導要領に示された教科の目標及び内容に通底している基本的前提を課題解決の知的ツールにとらえ、それらを教科の基礎・基本とし、チャレンジングな課題解決を仕組みながら、基礎・基本の転移を促すことで「豊かに生きるためのリテラシー」の獲得をめざしてきた。転移とは、新しい知識の学習も必要とする新たな状況で、古い知識を適用することであり、人が社会に適応して生きていくためには欠かすことのできない重要な心のはたらきである。転移は目標であると同時に、評価に利用することもできると考えられる。つまり、学習していることを記憶しているかどうかを基準にするのではなく、別の問題や状況に転移できるかどうかを基準にすることによって、どのようなリテラシーがどの程度獲得されているのか、教師の学習指導法は適切であったのかなどの評価が可能であるにとらえてきた。

そこで、本校保健体育科では、培うべき「豊かに生きるためのリテラシー」を「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための共通教養」と捉え、そのための基礎・基本を「運動の特性の視点」として整理した。さらに、この保健体育科におけるリテラシーの獲得のために、基礎・基本の転移を促す学びの文脈づくりを構想してきた。また、生徒たちに、基礎・基本の意味や価値を実感させることができる授業デザインの実践研究に取り組んできた。

また、中学校学習指導要領解説ー保健体育編ー（平成20年9月）の改善の基本方針の中の着目すべき点として、「子どもたちの発達段階を考慮しつつそれぞれの運動が有する特性や魅力に応じて指導内容を整理する」と明記されていることである。これは、学習場面で取り上げる運動やスポーツが、どのようなしくみで成り立っているのか、その骨組みを把握することが重要であり、様々な動きやプレーが技術として出立していることの根拠、すなわち「意味の世界」に子どもた

ちを導きながら学習活動を展開することの大切さを示唆しているととらえる。このような学習活動を通して、子どもたちは、運動やスポーツの魅力に触れ、その楽しさやよさを実感しながら生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力をはぐくむことができると考えられる。

このようなことを踏まえ、本大会主題における「体育的学力」と捉える「技能」「態度」「知識、思考・判断」を確実に身に付けさせ、運動の楽しさを味わわせるためには、獲得した知識・技能を活用して課題解決をする学習活動を仕組む必要があると考え、本主題を設定した。

◇「基礎・基本の定着を図る」とは

保健体育科の目標を達成し、内容を習得させるための課題解決のツールを教科の基礎・基本とし、その意味や価値を実感させながら生徒たちに確実に身に付けさせることである。

◇「獲得した知識・技能」とは

学習の過程において、生徒たちが課題の解決のために有効に働くと実感し、獲得した保健体育科における内容のことである。

◇「獲得した知識・技能を生かす活用型の学習」とは

生徒たちに新たな課題や場面に出会わせ、これまでに獲得した知識や技能が使えるよさを実感させながら課題解決を図る学習活動のことである。

(2) 仮説について

主題・副主題から次のように仮説を設定し、実践を行った。

保健体育科の学習において、確かな「体育的学力」の獲得に向かう環境や運動課題の選定に留意し、獲得した知識や技能が使えるよさを実感させながら、課題解決を図る活用型の学習を学習過程の中に仕組めば、生徒たちは、保健体育科における基礎・基本について、その意味や価値を実感させながら確実に身に付けさせることができるであろう。

2 公開授業 第1学年「柔道」

前時までに生徒たちは、「体落とし」や「大外刈り」などの投げ技の約束練習に取り組んできており、「体さばき」「くずし」の意味や投げ技のしくみについて学習を深め、約束練習において相手を投げることができるようになってきた。本時では、「受」「取」の役割をつけた自由練習で、相手の動きを想定し、自分の得意な技を使って相手を投げることができるようになることをねらいとした活用型の学習を仕組み、柔道の基礎・基本としてとらえた「力を合理的に使うための視点」について、その定着を図ろうと考えた。

まず、黙想と座礼で授業を始め、学習に取り組む構えをつくらせた。その後、パートナーと協力させながら準備運動と三方向（後ろ、横、前回り）の受け身の練習を行わせ、活動の準備とさせた。

次に、前時までの投げ技の学習を振り返らせながら、投げ技における「体さばき」「くずし」の必要性を想起させ、本時のめあて「相手の動きを想定して投げ技をかけよう」と本時の学習活動を確認させた。ここでは、「約束練習①→自由練習①→約束練習②→自由練習②」という流れで、約束練習と自由練習を交互に取り組むことと、自分のパートナーと練習する投げ技をあらかじめ確認させた。

2人組で受け身の練習をしている様子



さらに、約束練習と自由練習を行わせた。約束練習①では、「受」をしている生徒があまり動かない状態で投げ技の入りを練習している生徒が多かった。そのためか、自由練習①では、一生懸命に「取」をしている生徒が投げ技をかけているものの、実際に動く相手をうまく投げる事ができた生徒はあまりいなかった。そこで、約束練習②に取り組ませる前に、投げ技に入るとき、「くずしの方向に追い込む動き」の必要性について確認した。つまり、自分の得意な技で相手を投げる事ができるように、つり手、引き手の使い方、体さばきを工夫させながら、くずしの方向に追い込む動きを探らせながら練習に取り組ませたいと考えたからである。また、相手の動きを想定しながら練習に取り組むように指示をし、約束練習②を行わせた。生徒たちは、大外刈りで相手を投げるために、「右後ろすみ」の方向に押し込みながら技に入ろうとしたり、体落として相手を投げるために引き手の使い方を工夫したりするなどして取り組んでいた。自由練習②では、約束練習の成果を生かし、相手をくずしの方向に追い込んで投げ技に入ろうとする姿が多く見られた。しかし、投げ技への入り方が不十分であったり、スムーズな動きができなかったりするため、うまく相手を投げる事ができない生徒もいた。自由練習後は、練習した成果を確認させるとともに、自分の課題を把握する手がかりとさせるために、パートナーで互いの投げ技や動きについて、アドバイスを行わせた。

最後に、学習カードに練習した内容、その成果と課題について記入させ、本時のまとめを行わせた。ここでは、くずしの方向に追い込むために必要な動きについて、学習カードにまとめさせ、練習をしたパートナーと効果的な動きについて確認させた。また、相手を「くずしの方向に追い込む動き」として、大内刈りから大外刈りへ連続して技に入ること、大外刈りのくずしの方向である「右後ろすみ」へ相手を追い込む工夫をしていた生徒の動きを全体に紹介し、柔道の基礎・基本としてとらえた「力を合理的に使うための視点」の意味や価値について気付かせることで本時のまとめとした。

2人組で約束練習をしている様子



自由練習をしている様子



自由練習後、アドバイスをしている様子



「くずしの方向へ追い込む動き」の工夫を紹介している様子



生徒が記述した本時の学習カード

11月19日 金曜日 3 校時

めあて 相手の動きを想定して投げ技をかけよう。

投げ技の約束練習

く大外刈りかるとき
重心を左足にのこす
動いてもらい、技をかけること

く大外刈りかるとき
相手に付かず、自由練習
を想定し、右足に大外刈りした。

投げ技の自由練習 練習パートナーくより

	対戦者	技をかけた回数	投げた回数	投げることができるようになるためのアドバイス
1本目	正	6回	1回	もう少しと引きつける。
2本目	正	6回	2回	くずしかたをもう少しつた。

学習全体を振り返って

◇ 今日の学習で、「できたこと」や「わかったこと」
一回大外刈りしたときに、
大外刈りを見せかけ、
大外刈りしたら、ついていた。(正)

◇ 「できなかったこと」や「難しかったこと」
大外刈りかるとき、くずし

11月19日 金曜日 3 校時

めあて 相手の動きを想定して投げ技をかけよう。

投げ技の約束練習

く大外刈りかるとき
重心を左足にのこす
動いてもらい、技をかけること

く大外刈りかるとき
相手に付かず、自由練習
を想定し、右足に大外刈りした。

投げ技の自由練習 練習パートナーくより

	対戦者	技をかけた回数	投げた回数	投げることができるようになるためのアドバイス
1本目	正	6回	1回	もう少しと引きつける。
2本目	正	6回	2回	くずしかたをもう少しつた。

学習全体を振り返って

◇ 今日の学習で、「できたこと」や「わかったこと」
一回大外刈りしたときに、
大外刈りを見せかけ、
大外刈りしたら、ついていた。(正)

◇ 「できなかったこと」や「難しかったこと」
大外刈りかるとき、くずし

3 研究協議

- 研究の内容から、「活用型」「習得型」の学習について、今回は、武道領域の授業であったが、他の単元（領域）にあてはめるとき、それぞれの型の共通項として考えられることは何か。
→本研究では、「基礎・基本」である。基礎・基本のとらえ方は様々であるが、本実践では、「力を合理的に使うための視点」を基礎・基本としてとらえている。つまり、理にかなった技、使える技を自由練習に出すために、どちらに追い込んでいけばよいかなど、基礎・基本の意味や価値を実感させていくために、積極的に「活用型」の学習を仕組んでいくことを考えている。
- 男女別々の授業だと思っていたら、男女教習だったので、驚いた。授業の内容やストレッチ、準備運動など、参考にさせていただきたい。柔道、剣道の選択はどのように行っているのか。
→教師側の指導体制や設備・用具の面から学校として柔道を選択し、学習に取り組ませている。
- 単元計画をみると、抑え技から投げ技という順番で指導をされていたが、逆の場合もあると考えられる。本実践の計画にはどのような意図があったのか。
→指導の順番に関しては、抑え技→投げ技、投げ技→抑え技のどちらの場合もある。相手を引く方向や押す方向、体重をどうかけるかなど、まず抑え技の指導を通して学習させ、投げ技につなげた方が、本実践で基礎・基本としてとらえている「力を合理的に使うための視点」の意味を生徒たちが実感できるのではないかと考えた。このことによって、生徒たちが動きの工夫しながら投げ技に入ることができるようになるのではないかと考えた。
- 2、3年に向けてどのように学習内容を発展させていくか。
→2年生では技の精度を高めることや技を連続していくこと、投げ技から抑え技につなげていくことなどに発展させたい。3年生では互いに技を掛け合えるような自由練習ができるよう発展させていきたい。
- 生徒たちがまとめている学習カードの内容について、生徒によって書き方が様々である。しっかりとかけている生徒もいるし、内容が不十分な生徒もいる。学習カードでの成果と課題のまとめ方を、高めさせていくための指導の工夫などはあったか。
→ノートについては、たくさん書いている生徒でも、内容を見ると不十分な生徒が多い。学習ノートの書き方、活用のさせ方についての指導は、今後の課題である。
- 量の広さに対して、活動する人数（生徒数）が多いと感じた。そのためか、活動量がやや少ないようにも感じた。場所の使い方などで配慮したことは何か。また、生徒たちの学び合いや教え合

いなど、これまでの学習の中でどのように取り組ませてきたのか。

→活動場所については、本校の物理的な環境から、これ以上広げるのは難しい。活動時間や量については、もう少しとってやりたいと思うが、本実践では精一杯のように感じる。自由練習では、男女それぞれ5組ずつで行っていたが、4組ずつならもっといいと思う。今後の課題である。生徒たちがお互いに学び合いや教え合いをしていくため、本実践では常に2人組での活動を仕組んでいる。約束練習は、そのパートナーと行い、自由練習は他の組の人と行う。それを見て自分のパートナーにアドバイスをするようにさせている。

- ・畳に赤や白のテープが貼ってあり、生徒も周りを見ながら危なくないように活動していた。よく指導されているという感じがした。安全面での配慮として、どのような指導上の工夫があったのか。

→抑え技の自由練習では、隣のペアとぶつかったら一回離れてもう一度組み直すこと、投げ技の自由練習では、倒れたり投げられたりしたらすぐに立ち上がることなどを安全上の約束事として指導している。また、時間を決めて自由練習に取り組ませているが、生徒たちの状況を見て、教師側で意図的に時間を短くしたりやや長くしたりしている。

- ・指導案では、態度面での評価について抽象的な表現になっているが、そのような抽象的な内容を1年生の生徒にどう伝えていったのか。

→伝統的な行動の仕方とその価値について指導することに難しさを感じる時がある。座礼や黙想などの動きを所作としてしっかりと教え、実践させている。また、「左座右起」について説明したり、武道は相手を尊重するスポーツである（相手がいないと何もできない）ということをしつかり話をしたりしながら、必要な場面で正しい所作をさせるようにしており、このことを通して態度面の指導につなげている。

- ・男女それぞれの特性を考えたとき、それぞれの指導内容に違いはあるものと考えているか。

→指導内容については、同じでいいと考えている。指導の方法や手だてに関しては、男女の特性に応じて違いがあるかもしれない。本実践では、男女とも同じ指導内容である。

4 指導助言

【武道の学習指導について】

指導助言者：福岡教育大学 准教授 本多壮太郎 先生

現在では、武道といえば、一般的に日本武道競技会に登録されている9つの格闘技をさす。中には、試合のある武道と試合のない武道、用具を使う武道と使わない武道があり、柔道は、用具を使わない試合のある武道に分類される。また、柔道は「投げる」「固める」という技術が必要である。

武道の学習における基礎・基本の習得過程において、大切なことは、「真剣さ」である。

これは、技ができる楽しさや喜びを味わい、礼節的側面（意義、礼法）の理解と実践につなげるための態度として求められるものである。「互いに真剣に行うから互いの技術・技能の習得、向上が図られる」という考えからであり、お互いが「助け合い、高めあう『道』の仲間である」という意識をもたせることが大切である。そして、道を説くならば「道（筋）」を示さなければならない。

本実践では、「習得←→活用」の過程を通して武道の醍醐味に触れさせながら、対人的技能の学習の関連で、基礎・基本の定着や伝統的側面の理解を図る「道（筋）」を示している。そうするこ

とで「わかる」「できる」「かかわる」「ためす」「工夫する」「練る」という具体的な学習の展開をめざすことができ、体育的学力の形成につなげられる。ここでは、「技」のとらえ方がキーポイントとなる。武道における「技」は、力まかせ、体格まかせのやみくもな攻撃を行うものではなく、隙や機会を作り出す（攻め、くずし、読み、誘い）ことにより遂行するものであり、理に適った攻撃を「技」ととらえ、追求していくものである。

そこで、武道の学習指導における戦術学習の見直しが大切になってくる。ここでは、技術学習の重要性に気付くための戦術学習となるように配慮しなければならず、戦術学習を通して「求められる戦い方」について理解する機会を提供することができる。さらに、対人的技能の学習との関連で「適切な場、タイミング」を設定し、礼節的側面を理解し、実践する機会を提供することができる。

武道の学習指導において大切なことは、「武道の醍醐味を伝える」「何のための基礎・基本か理解させる」「真剣さを促す」ことであり、そのための適切な学習従事時間、運動量を指導者は確保しながら授業を展開する必要がある。また、学習者の肯定的・情意的コミュニケーションが図られるよう配慮する必要もある。

5 ま と め

研究協議では、研究主題に関わることから柔道の授業をする上での素朴な疑問まで、様々な質問や意見が多く出され、充実したものになった。本研究における基礎・基本のとらえ方、活用型の学習の意図など、参観された多くの先生方の理解を得られたように感じた。また、本多先生の指導助言では、本時授業のねらいを踏まえながら、武道学習における多くの示唆をいただき、多くのことを学ぶ機会となった。

（１）成果

○生徒たちに与える運動課題として「相手の動きを想定する」視点を取り入れ、活用型の学習を仕組んだことは、対人的技能の獲得と本実践で基礎・基本と捉える「力を合理的に使うための視点」に対する意味や価値について実感させることにつながり、基礎・基本の定着を図ることにつながった。

○投げ技の自由練習において、相手を投げるために「くずしの方向に追い込む動き」の必要性をタイミングよく提案したことは、生徒たちに課題を解決させるための糸口となった。

（２）課題

●学習内容の系統性を意識しながら、積極的に活用型の学習を取り入れ、より発達段階に応じた３年間を見通した指導計画を洗練させていく必要がある。

●生徒の中には、スムーズに技をかけることができず、技のかけ方の練習に終始してしまっている生徒もいた。練習時間や運動量の確保などを検討しながら、さらなる授業改善につなげていく必要がある。